

## 不登校解消を目指して

### 【江戸川区立 A 中学校の取組】

#### 不登校生徒の状況

対象生徒は、仲のよい友達がいなかったことにより、教室に入れなくなった。保護者が学校まで連れて来ても校門で体が固まってしまい、対応が非常に困難な状況であった。

#### 具体的な取組

校内委員会において特別支援教室専門員や巡回指導員、スクールカウンセラー、養護教諭からの意見を参考にして具体的な対応策を検討した。生徒の発達の課題等を整理することで、より効果的な声掛けの方法等を考えた。

加配教員を中心として全教員で別室対応やお迎えをした。

まずは、別室登校を継続するという短期目標、次に教室復帰という中期目標を設定し、スモールステップを踏ませることに取り組んだ。



校内委員会、SCからの情報、専門員によるこれまでの授業観察記録、毎日の別室での記録等を一括管理することで、情報を整理した。

このことにより、生徒への有効な働きかけについて学年で「毎日」協議をすることができた。

校内委員会、学年会において生徒の得意とする分野からの働きかけや行事を活用する手法を検討した。

生徒による朝のお迎えや得意な授業への参加、行事や部活への部分的な参加等を行った。対象生徒の状況を全教員が把握することにより特別の支援を行った。

#### 成果

加配教員を中心として生徒の歩みに合わせた柔軟な対応を考え、組織的に対応してきた。

別室登校が続いた生徒1名は、加配教員を中心として全教員で別室対応やお迎えをしたことにより2学期から完全復帰することができた。

#### 課題

あらゆる手段を講じても結果につながらない場合もある。より専門的な知識をもった専門家の支援を受けることが今後の課題である。

## デジタル機器を活用した不登校児童・生徒支援について 【江戸川区立 B 中学校の取組】

### 不登校生徒の状況

令和4年度不登校支援対象生徒41名（6月30日現在）のうち多くの生徒・保護者が学校との関わりや学習の継続を希望しているが、学校生活や対人関係への不安から教室に入ることができていない。うち18名が校内設置の自主学习教室（エンカレッジルーム）を利用し、18名がSCとの定期的な面談を行っている。特に3年生は受験期の心身の安定と学力定着を目的とした利用が多い。

### 具体的な取組

#### ▶ 毎日の授業配信

対象生徒に向け、全教科の授業で「Microsoft Teams」でオンライン配信を行った。通常時は板書内容がわかるように黒板全体を投影し、実験やグループ活動時には教室にいる生徒がタブレットを動かし、一緒に活動に参加することができた。全学年の授業を配信することで、自分に必要な内容をさかのぼりながら学習することも可能とした。

また、儀式的行事や朝礼、運動会等の行事も配信を行い、学校生活の雰囲気味わえる環境づくりを行った。



#### ▶ 学校長、SCによるオンライン面談

「Microsoft Teams」のビデオ会議機能を活用し、学校長・SCと不登校生徒及び保護者の面談機会を設定した。自宅から出ることができない生徒の生活の様子を聞いたり学校への思いを共有したりできる、相談しやすい環境を作った。

#### ▶ 教員との関わりづくり

「Microsoft Teams」で希望する不登校生徒を含めたチャンネルを開設した。加配教員や担任による投稿に反応したり、生徒同士でコミュニケーションをとったりするなど、小さな教室として機能させることができた。また、エンカレッジルームでの合同学習の告知をすることで、個別学習をしている生徒の興味を高めることもできた。

日頃から積極的な関わりを求めない生徒が多いが、文字でのやりとりをステップにエンカレッジルームでの会話ができるようになったり、担任が本人の願いや望みを知る手がかりが増えたりした。



#### ▶ 登校生徒の状況把握

不登校生徒が登校したときに学年教員とスムーズに繋がれるよう、不登校支援専用 Teams チャンネルを開設した。登校状況や学習の様子を加配教員がリアルタイムで投稿することにより、それを確認した学年教員らが対象生徒に会いに行きやすくなり、スムーズに関わりがもてるようになった。

### 成果

デジタル機器を活用することにより、これまでより多くの教員が対象生徒に関わることができた。その結果、様々な立場から生徒を見守り、教室外でも生徒は育っているという意識をより強めることができた。

生徒自身は落ち着いた環境のなか、安心感を保ったまま教室の雰囲気を味わい他者と関わることで、より柔軟な人間関係の構築を目指すことができた。

### 課題

デジタル機器を通してはいるが、実際は人と人との関わりが重要であることが実感できた。次年度以降、デジタル機器を活用する教員の生徒支援教育を充実させる必要を感じている。

## エンカレッジルームを活用した不登校生徒の支援

### 【江戸川区立C中学校の取組】

#### 不登校生徒の状況

- ・対象生徒は、友人関係の悩みや学業など複数の要因から、教室で授業を受けることに困難を感じはじめる。欠席や登校しても保健室で時間を過ごす日が増えたため、エンカレッジルームを使用して別室での登校となった。

#### 具体的な取組

- ・友人との人間関係の維持、学校の雰囲気を感じるために、加配教員や担任が頻繁に声をかけ、教室へ入れる時間（給食配膳時、朝および帰りの学活）に支援している。

- ・週1回の教育相談委員会で、生徒の現状や今後の支援について、教員間で議論および共有している。
- ・今の精神状況や困っていることを教職員が不登校生徒に聞き、気持ちを受容している。

- ・一人一台端末を活用し、個別最適な学びの実現を目指している。ある生徒はオンライン配信にて授業に参加し、またある生徒は漢字ワーク、計算問題といったドリル型教材に取り組んでいる。生徒たちは主体的に、自らができることを自らが選択して学習している。



#### 成果

- ・本人が給食を取りに行く、朝と帰りの学活には学級に入るなど、できることが増えてきた。
- ・保健室で休むのではなく、エンカレッジルームで自主学習に励めるようになった。

#### 課題

- ・学習の遅れやつまずきに対して、本人が理解し、克服できるよう時間をかけて指導すること。

## エンカレッジルームの活用について

### 【江戸川区立D中学校の取組】

#### 不登校生徒の状況

教室に全く、または部分的に入ることができない生徒が11名おり、その他学校生活が起因して教室に一時的に入れられない生徒についても登校して学習する教室になっている。

#### 具体的な取組

- ・本日の気分について確認し、自主的課題の設定を決める。
- ・加配教員の支援を受けながら学習に取り組む。
- ・基礎・基本問題は事前準備したものも使用できる。またeライブラリーなど学習支援アプリを使用して学習をすすめる。

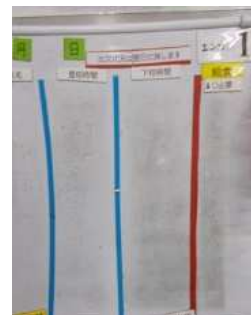
- ・タブレットにより自身の学級の授業を視聴し、学習する。課題は教科担当に個別に提出して評価評価を受ける。



- ・学習自体が登校の負担となり、引きこもりからの脱却を目指す生徒については、絵画など趣味から派生する教科の指導を可能な範囲で受けている。



- ・エンカレッジルーム利用生徒の登校を職員室のホワイトボードで共有している。
- ・給食の有無なども対象生徒の意向に沿う形で対応している。



- ・その日の気分・振り返りなどを記録するシートや基礎学習のプリントなどがエンカレッジルームの引き出しに入っている。



#### 成果

教室に入ることが難しい生徒のうち、エンカレッジルームには常時5名程度が利用している。学校生活に起因して一時的に入れられない生徒もおり、多い場合は9名になることはある。コミュニケーションを取る中で教室復帰していくケースもある

#### 課題

前年度より継続の不登校生徒が完全に登校できるケースは少ない。家庭環境の課題については踏み込み難い。



## SSW や SC を活用した不登校支援について

### 【江戸川区立 E 中学校の取組】

#### 不登校生徒の状況

不登校生徒は、本人の特性や心因的な要因が多く、小学校から長期にわたる不登校も少なくない。学校としては、専門的な外部機関ともつながるよう促している。SSW や SC、学校サポート教室、児童相談所、病院などつながっている家庭が多いため、学校はそれぞれの機関と連携をして不登校生徒の支援を行っている。SC の定期的な保護者面談の結果、小3から不登校であった生徒が、中3の10月に初めて登校できたケースや SSW が何度か家庭訪問を行い、生徒に会うことができたケースがある。

#### 具体的な取組

SSW（スクールソーシャルワーカー）が、不登校ぎみの生徒や保護者と直接面接を行い、相談にのったり、アドバイスをしたりしている。また、学校と連携をして情報共有をし、生徒や家庭の支援を行っている。

不登校対策委員会を隔週で開催している。生徒情報の共有や支援方法の検討を行い、生徒を多面的にとらえて生徒支援を行っている。



週1回 SC（スクールカウンセラー）が定期的に来校し、保護者や生徒の相談に応じている。

生徒や保護者にとってホッとできる貴重な場となっている。



SC（スクールカウンセラー）による1年生対象の全員面接を実施している。SC は生徒の行動観察を行うとともに、必要に応じて個別に生徒の相談にのり、生徒を支援している。また、生徒情報は、随時担任や特別支援委員会等で共有し、生徒の支援を行っている。

#### 成果

不登校生徒の出現率は令和2年度6.57%から令和4年度9月現在3.03%へと減少した。また、不登校生徒は、学校内外の機関等による相談、指導などに関わり、生徒や保護者の支援をすることができた。

#### 課題

生徒の特性や心理的な状況に配慮しながら、学習する意欲を引き出していくことが課題である。

## 不登校対応加配教員を中心とした取組について

### 【江戸川区立F中学校の取組】

#### 不登校生徒の状況

対象生徒の多くは、対人関係のソーシャルスキルに不安を抱えている状況である。また、不登校が始まる明確なきっかけや理由を生徒本人もうまく説明できないケースの割合が増加している。

#### 具体的な取組

\* 毎週水曜日にエンカレッジルームを開設し、不登校生徒の個別学習の場を作っている。加配教員が特別支援教室専門員と連携し、不登校生徒との関係構築を図っている。また、不登校生徒が教室復帰を目指していくステップとして、個々の生徒の状況に合わせて加配教員を中心として別室登校の環境を整備した。

\* 不登校生徒の状況に合わせて、江戸川区教育研究所から発信されている教育相談や学校サポート教室についての情報提供を本人や保護者に行えるよう、加配教員が中心となって学級担任と連携を図っている。また、学校サポート教室からの定期報告をもとに、加配教員や学級担任が参加状況を把握し、生徒や保護者への次のアプローチを検討する材料としている。

\* 毎週木曜日に実施している特別支援兼不登校対策委員会に合わせて、加配教員が中心となり各担任から不登校生徒の状況の変化を集約し、校長・副校長・SC・特別支援教室専門員・特別支援コーディネーター・養護教諭等と情報共有を行っている。



\* 1学期末に行ったハイパーQ Uの結果を加配教員が学級ごとに分析しまとめた資料を基に、10月の研修会において、不登校の未然防止のための学級や学年での取組について全体で協議し共通理解を図るとともに、今後取り組むべき内容について確認した。

#### 成果

\* 不登校生徒の出現率は、加配前年度の7.69%から加配3年次10月時点の5.73%へ改善した。

\* 対策委員会を毎週開催することで、校内での協力体制を組織的に構築することができた。

#### 課題

\* 学校内外の機関等による相談・指導等を受けていない生徒の割合をより低くすることが課題である。